

## 余 話

### 江 村 一 雄

故田村市太郎さん：或る年の北陸病害虫研究会前夜の宿，“ラムライ，ラムライと申す。おい飲め！ワッハハ”。1 升びん片手に現れたのは田村市太郎さん。ひどいカゼをひいておられた。多分有意義な話を伺ったのだろうが全く覚えていない。ただし，私は帰宅後高熱を發し，寝込んでしまった。

豪傑田村市太郎さんは北陸農試の虫害研究室長，環境部長を歴任され，研究会長も務められた。病害の小野小三郎さんとは名コンビで，お二人の違った持味の格調高い話術や文章は，ともに絶品であった。研究会のお世話には特にご熱心で，原稿にはよく手を入れていただいた。

或る時「江村君，要防除水準で何だい」との御下問，口頭試問である。馬鹿正直に「発生予察のバックボーンだと思います」と答えたところ「ふーん。うまいこと言うじゃないか」といわれた。イネドロオイムシ生命表の仕事を小嶋昭雄さんと始めた頃である。農家にわかる研究を，成果は発表しろと言われ，研究会報にトピックスのコラム欄を提唱されたり，数々の発想は枚挙にいとまない。

退官後は郷里の群馬県に帰られたが，日ならずして病のため他界された。好漢惜しむべし。先生の研究哲学をもっと伺っておけばよかったと今も思っている。

雪虫研究会：雪国に春が来て雪面を凍み渡りできる頃，小さな昆虫が現れる。雪虫，セッケイカワゲラという。これは研究に値する。それにはカンジキが必需，機動性を考えればスキーが一層よろしく，早期発見には降雪時から取り組むことが重要と先人は考えたに違いない。発想は研究の母である。

この会には会長がいない。会則もなければ会費は加入者負担。ただし，事務局は当然（？）北陸農試の虫害研究室，会員は参加者全員，スキーの技術は不問，会場は赤倉が多かった。会報も発行された。ただし，初刊で終刊，つまり1回でつぶれた。佐藤昭夫さんが編集から和文タイプまですべて担当して下さった。常楽武男さんの学術論文セッケイカワゲラが白眉であった。

赤倉の宿ではオンザロックを飲んだ。材料の氷はツララ，無尽蔵にある。女性研究者も加わって談論風発，翌朝は案の定グロッキー。ただし，女性陣はケロリ。雪虫研究会報にはこれはオフレコであった。

一杯の酒は百年の知己を得る。その後の仕事の輪にも大いに貢献した。副次効果である。そして今，北陸病害虫研究会報は半世紀を迎えた。その間に大害虫ニカメイチュウは姿を消した。イネカラバエなど著名害虫も伝説になった。20世紀最大の侵入害虫イネミズゾウムシも急減し，代わってカメムシ類がクローズアップされている。

発生変動の原因は一様ではないだろう。殺虫剤の發達は重要な抑制要因に違ひなからう。しかし，これがすべてではないこともニカメイチュウなどでは立証されている。(1979：江村・小嶋，北陸病害虫研報27，など)。

「絶滅は繁栄の裏街道である」(1976：宮下和喜著，絶滅の生態学より)。これからの害虫研究をになう研究者の皆さんが10年後の害虫研究を視野に何をテーマとすべきか温故知新を含めてデスカッスする場を持つことも無駄ではないかも知れない。今日の問題だけに目をうばわれることは病害虫研究者が単なる便利屋に終ることを案ずることが年寄りの冷水であれば幸いである。